Journal for Children Crossing Borders
ジャーナル「移動する子どもたち」ーことばの教育を創発するー
2021年　第12号　pp. 126 - 134

書評

「人間関係を探求」する新たなアプローチへの期待

川上郁雄，三宅和子，岩﨑典子 編(2018).『移動とことば』くろしお出版.

鄭　京姫 *

ⓒ 2021. 移動する子どもフォーラム．http://gsjal.jp/childforum/

1．なぜ，バイフォーカルで地動説的なアプローチなのか

本書（川上ほか，2018）は，オムニバス映画のように，互いに関係のないようないろいろな人の人生が「移動」と「ことば」という記憶と経験，そして時間によって語られる中で意味を獲得していく様子がリアルに描かれている。各論考は , 人や物の物理的な移動を始め，言語間の移動である。また，人生の中で，時間と空間，世代，歴史を越境して移動していた。さまざまな角度から移動を捉えていたが共通しているのは,「移動」が常態であるという視点だ。それは本書の問題意識の所在でもある。

なぜ「移動とことば」なのか。「移動とことば研究」とは何か。移動の時代を生きる今,「バイフォーカル（bifocai）なアプローチ」(p. 9)」と「地動説的な研究」(p. 8) がなぜ重要なのか。序章で，編者の一人である川上は，その意味について述べている。21世紀において,「移動する人々の課題をどのように捉えるか」(p. 2) という課題が重要になってきた。人々の移動は地球規範で急速に増加しているが，移動する人々の個別性，動態性，複合性は考慮されておらず，集団内の本質主義的な統一体として捉えられていることを川上は指摘する。ことばもまた,「流動的なプロセスであり，個人のなかの複数性を捉える考え方」(p. 7) が重要であることを主張

* J-Life 日本語教育研究所（E メール：hime0404@gmail.com）

する。

さらに，川上は社会学者のジョン・アーリの言う「移動論的回転（mobility turn）」（p. 2）を挙げ，移動を重要な要素として捉えるパラダイム転換が必要であることを説明する。そして，定住を前提としたこれまでの研究から離れて「移動（mobile）」の視点が重要であることを確認する。その上で，研究のアプローチとして天動説的研究と地動説的研究を取り上げ，本書の立場を強調する。天動説的研究とは，自らが動いていない，定住型視点であると説明する。一方，地動説的研究は，視点が動く（mobile）というアプローチで，移動する人々に寄り添うものである。したがって，本書は移動する人々の生活を常態と捉え，「移動」と「ことば」というバイフォーカル（bifocai）」なアプローチと地動説的な研究を目指す。

私が本書に惹きつけられた理由は，このような問題意識に深く共感したからである。「日本語人生」（鄭，2012）というライフストーリー研究をしている私は，一人ひとりの人生を支えることばの教育のあり方を探ってきた。日本語教育において，学習者は何らかの観点によりカテゴライズされて論じられたことが多かった。日本人の日本語という唯一で固定的な日本語像によって，彼／彼女らの見方やアイデンティティが制限されており，他者とのコミュニケーションにおいて阻害を感じていた。一方，彼／彼女らの経験の語りは　考え方から生き方に至までその人の過去，現在，未来が織りなされていた。移動の経験で自分の言語能力を意識し，経験と記憶の意味付けが変化しており，それがアイデンティティの更新につながっていたのだ。

移動と越境の時代を生きる「わたし」は流動的である。外国語を学ぶ「〇〇な人」ではなく，一人ひとりが変化していく主体である。「固定的で限定的に捉えられる彼／彼女らのアイデンティティが「〇〇人」という唯一性から，多様性に変わ」（鄭，2013，p. 227）らなければならない理由がここにある。本書が目指すバイフォーカル（bifocal）で地動説的なアプローチは，唯一である概念をほどいていくことにつながると期待する。

2. 本書の構成と概要

本書は，序章と2部からなる11本の論考と展望討論で構成されている。「移動」と「ことば」に関する11本の論考は，どれも質的研究の手法を用いていた。

第1部は「移動の中のことばとアイデンティティ」というテーマで，留学生や親の都合によって移動を続けている子ども，外国につながる子どもなど横軸で移動をしている人のことばとア

イデンティティに迫るものである。

岩﨑典子論文（第１章）では，留学という空間の「移動」を捉えている。「日本人とイギリス人のハーフ」であると自分を紹介するハナさんの言語アイデンティティがハーフ（half）からホール（hole）になる姿を「言語ポートレート」というイラストで留学前，留学中，留学後を追いながら確認した。ハナさんは，日本でのさまざまな経験，思いをしながら自己への意識が変わっていく。日本語の学習についても肯定的な自己評価ができ，前向きになったことがわかる。

倉田尚美論文（第２章）では，オーストラリアで継承日本語を学ぶ３人の学生が「なるべき自分」と「なりたい自分」の間で動機づけを行いながら日本語学習に意味付けている姿が確認できる。肯定的な自己イメージは学習動機を高め，理想とする自分を思い浮かべ，「なりたい自己」に近づいていく。そして，安定的な自己認識ができ，セルフ・アイデンティティを構築していた。このような自己イメージは，他者，さまざまな状況，環境，社会状況などと相互作用によって起きるのである。

山内薫論文（第３章）では，日仏国際家族環境の背景を持ち，フランスの大学で日本語を専攻した学生を対象にした研究である。人は，生涯という時間の移動と学習環境の変化という空間的な移動を統合し，永続的に「移動」する存在であると捉えた。そして，日本語に限らず，他者との関係の中で学びを得ていることを明らかにしながら，生涯教育の枠で学びを支援する教育の意味を語っている。

本間祥子論文（第４章）では，親の都合によって「移動」しながら生きるシンガポール日本人学校の小学生を対象に行った実践を紹介している。「移動しながら生きる自分と向き合う」（p. 92）授業を行っている佐倉先生は，子どもたちが「自分の生活を語る力」を獲得することが必要であることを述べている。「語ることによって相手から理解され，受け止められるものである。それが「ことばの力」で，それを育成することによって，「人とつながりを感じ」，「自ら人とつながっていく」（p. 95）ことを実践から振り返る。

人見美佳・上原龍彦論文（第５章）では，個人の中に複数の「国」と「ことば」があり，それらの枠組みを「移動」し続ける外国につながる子どものキャリデザインの支援を主張する。本章では，フィリピンにつながる A さんと，中国につながる G さんが自らの人生を構築していく様子が描かれている。子どもたちが自身の「これまで」を踏まえ，これからを創っていくためには，「いま」を考えられるような支援の必要性を浮き彫りにしている。

続く第2部は「移動の中のことばとライフ」というテーマで，空間と時間，世代と歴史を越えた移動に焦点を当てたものである。

三宅和子論文（第6章）は，母と娘の国際結婚家庭2世代のライフストーリーである。1960年代にイギリスに渡って国際結婚をした母の愛子は50年を超す在英生活でどのように日本語を保持し，日本の情報を得ていたのか。また，人生の「選択」に社会変化が大きく関わっていたことを記憶と経験を「移動」しながら語る。その娘 Saki の例を挙げ，「移動する家庭に育った子どもは，大人になって『移動』する可能性が高い傾向」(p.146) にあると説明する。

上田潤子論文（第7章）では，45年ぶりに帰国を果たした「中国残留孤児」1世の佐藤フミ子とその子孫3名のインタビューである。フミ子の生い立ちは想像をはるかに超えるもので，長編ドラマをみているようだった。避難所にたどり着くと亡くなった妹，そして中国の義父の所に行って4日で亡くなってしまったお母さん。きっと苦しかっただろう。12歳のフミ子の姿が見える。日本人であること，いつか帰国できる日を願いながらことばの壁も乗り越え，45年という長い年月を経てきたフミ子に，暖かい応援が必要なのだ。

八木真奈美論文（第8章）では，アジアと南米から移住し，日本で暮らしているスウさん，リタさん，メイさんのライフストーリーを取り上げている。日本に住む移住者の生活，経験，日本語をどのように捉えているかをナラティブ分析によって丁寧に考察している。彼女たちは，来日前の経験をつなげて，主体的に日本語を学びながら，周りの生活に働きかけている姿が見られた。

大塚愛子・岩﨑典子論文（第9章）では，ろう者コミュニティーと聴者コミュニティーの間を「移動」しながら生きているトリニダード・トバゴで生まれ日本に移住したろう者のシンディさんの語りを紹介している。ろう者にとって移動はどのような経験であり，そのときにことばはどのようなものか，さらに，移動とことばはろう者のアイデンティティ形成にどのように関わるか，という点を考察している。「人にとって国境を越えるよりも大きな隔たりを超える移動が存在する可能性」(p. 211) を示唆する。

山下里香論文（第10章）では，国境を越えて「移動」したパキスタン国籍のムスリム女性4名の言語使用と意識の実態をエスノグラフィー調査によって捉えている。日本の学校では日本語，または英語を学び，家庭ではウルドゥー語を使用し，ムスリムとして学習するアラビア語など複数の言語環境で生きている彼女たちのリアルな言語生活とアイデンティティの意味が見て取れる。

川上郁雄論文（第11章）では，幼少期から複数の言語環境で成長したタイで生まれたBさん，ドイツで生まれた誠さんの人生に出会える。本章では，「「今，ここ」という日常的移動の横軸と，「あの時そしてこれから」という過去と未来をつなぐ個人史的移動の縦軸」(p. 250) から「移動」を捉えている。二人の共通点は，日本人の母親を持つ「ハーフ」であることと同年齢であることだ。二人の語りからは，移動によってアイデンティティの変容が起き，自分の生き方につながるものになっていく姿が見て取れる。

3.「人間関係を探求」する新たなアプローチへの期待

> 日本・日本語という固定観念に風穴を開けることにより，「人とことばと社会」の関係を問い直し，そこから，新たなリアリティと人間関係を探求したい。 (p. 9)

川上は強調する。

「移動」と「ことば」をバイフォーカル（bifocal）という焦点で捉え，移動する側の視点で動く（mobile)「地動説的」な研究という新たなアプローチに，私は共感し，期待する。論考からも確認したが「移動」の意味は国境を越えることで留まっていない。グローバル規模で日常化している人々の移動は量的，質的に変化している。そして，移動の時代の自己は一元的なものという認識はなくなりつつある。にも関わらず，人々の多様な関係性は「国民」対「外国人」という二者関係として集約されていた。

新たなアプローチが目指す「人間関係の探求」は自己をめぐる議論に広がると私は期待する。「移動」をしながらさまざまな他者と関係し，自己の多様性に気づくのである。さらに，自分の空間，居場所を変えながら自分のアイデンティティを再構築している。「人間関係を探求」することとは多様な「自己を探求」する意味だと考えられるからだ。

私はここでの「人間」とは移動の時代を生きている「わたし」であると捉え，考えたい。「わたし」とは，移動をしている一人ひとりであり，移動の途上にいる言語教育者である。

例えば，移動をしながら「〇〇出身」「〇〇系」など「わたし」を提示しなければならないときがある。むろん，外見で判断されるときもある。本書でも多様な国で移動してきたさまざまな「わたし」に出会えた。大学生，ムスリム女性，高齢者，日本に住む「移住者」，シンガポール日本人学校の小学生，日本語の「先生」，ドイツで生まれた「わたし」などである。また，日本人の母親とイギリス人の父親を持つ自称「ハーフ」の留学生，外見で「ハーフ」になった人，

「ろう者」,「外国人」というカテゴリーで生きる「わたし」もいた。そのカテゴリーの中には,自ら選んでも願ってもないのに,付与されたカテゴリーで「わたし」を表さなければならない人もいた。例えば,「中国残留孤児2世」と括られる人である。このように,一人の「わたし」をなす属性や枠組みは複雑,かつ複合的に絡んでいる。「わたし」というのは,名前を始め,性別,年齢,職業,民族,国家といった「属性」や性格,価値観,宗教などからなる。一貫性を持っている「わたし」を語るのではなく,流動的な「わたし」,複合的な「わたし」を意味している。

人は価値観を揺るがす出来事に出会うと自分と向き合い始める。自分とは何か,価値観にぶつかり,揺れ動くのだ。「ハーフ」はこうであるという周りの期待によって「ハーフ」として生きるしかない状況に追い込まれる。そして葛藤をする。「わたしはそうじゃないから」と。なぜなら,人間は一貫して固定したものではなく,状況的で多元的なものであるからだ。このような葛藤とせめぎ合いは,自分の中には,「こうである自分」という固定的な考えを始め,「なるべき自分」「なりたい自分」「なりたくない自分」といった自分が混在しているからだ。移動の状態に置かれた場合,「こうである自分」が強いと自分の存在において不安を感じることになる。人と人が出会い,語り合う。その時に,いろいろな形で示される自分とどう向き合い,語っていくのかが重要である。ことばは「わたし」を語る力でなければならなく,語る力をつけることでエンパワーメントできるのだ。

川上編(2010)は,「他者が思うことと自分が思うことによって形成される意識」(p. 212)をアイデンティティと捉えている。本書でも見られたが,幼少期から複数の言語環境と文化で成長した人々が他者からのまなざしとの間で自分を問い直し,自分を探していた。そして,一元的な自己ではなく,多元的な自己に気づき,さらに,明確な自己を持つとさまざまな変化に柔軟に対応できていた。自分らしいと感じるとき,肯定的な自己評価を行い,なりたい自分像を描くことになり,自分のアイデンティティの再構築につながるのだ。

移動をしている人々において自己を探求することは重要な意味を持つ。なぜなら,固定観念を解いていくためには,唯一であるとする人のまなざしと概念,「わたし」は変化していく主体であるという意識から始まるからだ。「わたし」を語り,主体的に考えていくことを支えることばの教育が必要である。

4. 移動の時代を生きる「わたし」たちへ

「枠」を疑わずに，その文脈で語る研究も確かにある。私は母語，母国語，外国語といった言語の境界（鄭，2014）について研究をしていたとき，多くの「中国朝鮮族」日本語学習者に出会った。中国の延辺に赴き，ライフストーリーインタビューを行ったこともある。当時，彼／彼女らは研究協力者になった経験を語ってくれた。共通して言っていたのは，「あなたは中国人ですか，韓国人ですか」「韓国と中国のサッカー試合があった場合，どちらを応援しますか」といった定番の質問をよく受けていたことだった。そして，それを聞かない私を少々疑う目で見ている人もいた。「一体，あなたは中国朝鮮族の何が知りたいの？」と。つまり，中国朝鮮族を規定するアイデンティティはネーションとエスニシティであり，それは普遍的なことであるとされていた。言い換えれば，中国朝鮮族というアイデンティティが他人によって決められ，語られていたのだ。

その意味で，八木論文（第８章）では，ある「枠」に人の人生を閉じ込めたくない研究者の姿勢が窺える。「外国人」ということばの代わりに「移住者」と呼び，語り手の国籍をも伏せている。その意図は十分理解できる。ただし，語りの中で「外国人」や「国籍」という「枠」を抜きに分析ができるのか，という疑問もあった。なぜなら，「わたし」を語る上でその属性やカテゴリーをきっぱり切り離すことはできないからだ。

メイさんは「外国人」である自分を語っていた。彼女は，日本の生活の中で一番大変なこととしてことばをあげている。そして「長ねぎ」ということばが分からなかったこと，「日本人ならいいのに」「外国人だな，と思うでしょ」（p. 184）と話している。また，「自分の国では「日本の主婦」のような人はそんなにたくさんではない」という語りの意味をメイさんの国の事情や背景を分かればもっと理解できることもあると考えた。もしかして，「外国人」という「枠」を伏せず，そのカテゴリーを持つスウさんの語りに寄り添ったら，「外国人はこうである」と思わせる社会の認識，「外国人になってしまった人」の気持ちなどが浮き彫りになったのではないか。

一方，移動する「パキスタン人ムスリム女性」の語りや「ろう者であるシンディさん」の語り，「中国残留孤児のフミ子」とその子孫の語りにおいては，「枠」は提示されているが，その人たちの人生の話は生き生きしていて，その語りに深く共感し，もっと理解しなければならないと私は思ったのだ。決して，「パキスタン人はこうだから」，「ろう者ってこうだよね」と片付

けて，決めつけて読まれるものではなかった。むしろ，その「枠」がその人たちにとって自分が自分でいられるような大切な背景，意味のように思われた。シンディさんは「手話を使うろう者である自分」というアイデンティティを確立している。それはきっとこれからのシンディさんを支える意味でもあると思ったのだ。

むろん，ライフに関わる研究を行ってきた私も，移動する人々は常態化しているのに，「○○人」は固定化され，本質的であるとされたことを問う立場である。研究者である「わたし」は移動している人々を「○○人」とみなすことを問題としなければならず，固定的なイメージに閉じ込めるのではなく，生きていて絶えず変化している存在として捉えることが重要であると考える。地動説的なアプローチを私は研究者の姿勢につながるものとして理解している。例えば，マイノリティと呼ばれる人々がいる。マイノリティの問題を問い直したい場合，マイノリティという「枠」に当てはめて考えるのではなく，「わたし」に焦点をあわせていくことで新たな社会問題が浮き彫りになるのである。

移動してくる人々は，定住者にとっては見知らぬ存在であるため，たびたび明確に分類され，カテゴリー化される。そのようなステレオタイプがその人のアイデンティティを代弁していること，一人ひとりが特別な存在ではなく，個別性を失ってしまうことの問題も否めない。私が，バイフォーカル（bifocai）で地動説的な新たなアプローチに期待する理由は，人とことばを動いていく視点で捉えることによって，「○○人」「××な人」を超えた人間への理解になると考えるからだ。

人びとが移動して集まる。集まって再び散っていく。人と関係を持つ事によって新たな空間が生まれる。断絶ではなく，人はそう「移動」しながら生きている。本書は，移動の時代を生きる「わたし」たちへ送る魅力的な一冊である。

文献

川上郁雄（編著）(2010).『私も「移動する子ども」だった ── 異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版.

川上郁雄，三宅和子，岩崎典子（編）(2018).『移動とことば』くろしお出版.

鄭京姫（2012).『言語教育としての「自分の日本語」その意義と可能性 ── 「日本語人生」という物語の意味』早稲田大学日本語教育研究科博士論文 .

鄭京姫（2013）．第Ⅲ部　言語教育はなぜアイデンティティを問題にしなければならないのか.

日本語教育と「日本語人生」── ことばとアイデンティティについての私論．細川英雄, 鄭京姫（編）『私はどのような教育実践をめざすのか── 言語教育とアイデンティティ』（pp. 219-254）春風社.

鄭京姫（2014）．誰が母語を決めるのか── 中国延辺地区における中国朝鮮族日本語学習者の言語意識調査を手がかりに『韓日語文論集』18，113-124.